

# 芥川だより

発行日 \* 2023年10月1日 e-mail: ab\_87968624@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸

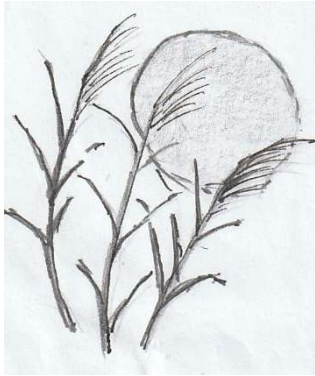
発行人 下村嘉明

〒661-0951

尼崎市田能5-3-10-601

☎090-8796-8624

\*\*\*\*\* 一部200円です \*\*\*\*\*



## やはり秋は来た

異常なまでの暑い夏がいつまで続くのかと心配していたら、急に冷え込み秋らしくなった。秋の時期を夏が食ってしまい、冬がすぐに来そうで嫌な感じだ。気温の変わり目は病気持ちの年寄りには辛い。朝は寒く日中は暑く夕方は冷えてくる日は重ね着を怠らず、着替え用のTシャツを持って仕事に出かける。

13年余り難病を抱えて生きていると風邪は天敵に等しい。絶対に風邪を引いてはいけないと注意してきたおかげで、一度も引いたことがない。身体の芯から温める運動こそが身体を病魔から守る術だと考え実践してきたからだと思う。ただ、腰痛だけは克服できずにいる。お気に入りの針灸の先生にお願いして打ち続けているのだが、重たい物を持ったり長距離の運転したりするのは良くない。調子が良いとついつい無理をしてしまう。適度な運動も必要で、要はバランスだと思う。

先日、家内が行きつけの近畿中央病院で検査を受けた結果、担当医から兵庫医科大学へ行くように言われたという。数日後、大学病院へ行き検査を受け教授の説明を受けると、「ほぼガンと考えて間違いないから、手術してガンか否かを決めて治療方法を決めましょう」教授の指示通り最短で空いている日を予約する。入院は1週間。

私は、家内の話を聞きながら、何か申し訳なくなった。私も、肝臓がんの疑いを何度もかけられながら、どういう訳かすべてクリアーだった。家内は、乳がん以来、幾度も再発の検査を受け続け異常が見つからなかった。それが、突然、MR検査で大きな白いものが見つかり、検査機器がそろっている大学病院での検査となりガンに間違いないだろうと宣告された。家内曰く、担当教授は自信満々に説明し、最新の手術をするという。季節の移り変わりのように、我が家にも寒い冬が待っているのか、予想外の暖冬が待っているのか、よく分からない秋を迎えてしまった。

死をめぐるあれやこれ(107)

石川 吾郎

### 膝と人生

この9月に五十年ぶりに高校の同窓会に出席した。その後今はない実家のあたりを歩き回ってあたりの変化に感傷にふけた。ふいに振り向いた拍子に左膝に痛みが走った。それから歩くにも一歩ごとに痛みがある。京都の自宅にやっとの思いで帰ったがそれから膝の痛みとの闘いが続いている。◆足を引かずって歩くことはできるが、五分ほど立っているとじくじくと痛む。痛みで膝は完全には伸ばせない。屈曲するには支障がない。ただひねりの力がかかるとギクツと痛む。このままでは今まで生活の中で出来てきた多くの事ができなくなってしまう。特に植物園の散歩や花の撮影といった愉しみができない。◆「膝の痛み」を検索すると、YouTubeで驚くほどの数の動画が挙げられている。多くの人が膝の問題で悩んでいることを実感する。それで勉強をしているいろやってみる。まずはリハビリ運動のやり方。またスポーツテーピングのやり方など。テーピングは確かに効果を感じて楽になるのだが、あとで皮膚が炎症を起こして長くはできない。◆膝の構造を調べてみると、一つの関節に過ぎないのに、実に多くの筋肉と腱がつながっている。膝という一つの関節の複雑さと偉大さをつくづく感じる。◆驚いたのは膝の内側の痛みの多くが、足の親指を屈曲させる筋肉が膝の部位まで伸びていて、その走行に沿ってマッサージをするだけで、改善する

という情報だった。実際にやってみると確かに効果を感じた。しかし、今回の私の症状はそれだけでは無理だった。他にいくつかのマッサージ方法や筋肉や腱のほぐし方で自分に合いそうなものを試してみる。痛む膝をかばって体の他の部分が緊張してアンバランスになる。膝の関節一つで自分の体の運動機能のシステム全体が崩れていくのを感じる。こういったことも人は受け入れていかなければならないのだろう。◆三週間ばかりで、ようやく少し改善してきたようだ。しかしまだまだ油断はできない。これからは、サポーターの装着は必須になるだろう。まだやっておきたいいくつかの事がある。崩れていく体のシステムをだましましたし、その中でなんとかしのいでいく生活になるのだろうと、今さらながら思っている。



巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム107	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 115	坂本一光	2
哲学叢いの時事放談 65	祖蔵哲	3
大峰奥駈道 71	下村嘉明	4
新型コロナウイルス愚考 その 37	明石幸次郎	4
オクラの山たより 85	因了生	5
支離滅裂 近未来予想 隠された歴史 60	y・s 満田正賢	10
同じ青春を過ごしたセツラーの元セツラーの皆 想い	さん	12
道を行く 四四	成瀬和之	15
俳句	影山武司	17
編集後記	SK生	17
ふみの道草 62	山椒魚	18

素老人☆よもだ帳 (115)

坂本一光

◆ 句の読まれ方

句の読み方ではない。読まれ方について思うことがあった。

ある著名なロシア文学者がテレビで語るのを聞いたことがある。ドストエフスキーの『罪と罰』を読んでいた中学生の頃、金貸しの老婆殺しの罪で官憲が自分を逮捕しにやってくるという恐怖にとらわれ、朝が来るのが怖かった、と言うのである。小説の主人公ラスコーリニコフにすっかり成り切ってしまったと言う。似たようなことだが、啄木の歌を読みながら私も、「私の中の私」は「あなたの中の私」だと思ったことがある。

啄木の歌は百年超えてなお  
我は私と私に届く

単純に言えば、それが句であれ、歌であれ、小説であれ、それに共鳴し共感を覚えるときには、そこに「私の中の私」の発見がある。作品の側から言えば、それが最高の読まれ方である。

しかしある作品が、この私にだつていつでも同じ読まれ方をするとはい限らない。私に関わるあらゆる状況が私の読み方を変えるからである。そのときの心のありようや、年月の経過やそれに伴う経験の積み重ねによる感じ方・考え方の変化等々が作品の評価に影響する。したがって、読み方が変わっても私の共感が変わらない作品には、「私」を超えるある種の「普遍性」があると言えるのではないか。そういう作品は、私と別の他の人の私にとつても、私と同じような共感を呼び起こすのではないかと思う。

至ったのは、ある句集に対して実に個人的な状況下で抱いた感想、評価を読む機会があったからである。紹介したい。

：「生きてゆく心のかたち五七五」を吟じ続けられて十年、すばらしい近詠集をお送りいただきましてありがとうございます。

貴兄のお元気を拝察し、瑞瑞しい感性衰えるどころか、「優しさが熟成をするエイジング」通りに生きておられるご様子はさすがと感心するばかりです。

昨日旅から戻ったばかりですが、お送りいただいた句集をめぐっております。川柳はクスツと笑うような句ばかりという思い込みを改めて、貴兄の句には考えさせられ、反省を迫られる句が多く深いです。

「しあわせは出会った人のおくりもの」や、「二つ山越えてやさしさ深くなる」は名句だと感じました。

ご両親をうたわれた句、「母百寿丸い背中を抱く介護」は胸をしめつけます。私も九十歳を過ぎて終末に近づきつつありますが、どういつ終り方をするだろうか、と先に逝った同輩の最後を思いつつ、残った息子達の心が、「人は逝き遠くて近い人になる」という貴句通りになるといいなあと考えたりします。

実は卒業生と二人で、昔生物採集に歩いた九州地方をめぐりましたが、三十年余の間の変わりようにはただ驚くばかりで

した。

どうぞお達者でお過ごしください。

（かたちは心であり、心はかたちになる  
■大分の素人）

## 「哲学爺い」の時事放談（65）

祖蔵 哲

### AIの哲学（前夜）

201号の時事放談、新たな気持ちでさらに深い哲学を目指そう。さて、時事の方はどうとまず、芸能ニュース・ネタになるがジャニーズ事件。故ジャニー喜多川社長の性的虐待疑惑は、今から遙か60年前、1964年には性的虐待に関する民事裁判が行われ、それ以降も告発本や週刊誌の記事など問題が表面化されていたが、世間は一切無視し続けた。それが突然変化するのはやはり、外圧である。日本には何事にも自浄能力がない。外国に非難されて初めて動き始める自律性のない国である。2019年に英国BBCが報道したが、コロナの影響があった遅れ、今年になってドキュメンタリー報道され改めて問題視された。この間、日本のメディアは所属タレントを重用しつつ、いくつもの大企業がCMで使

続けてきたのである。そして今日、事件が大々的に報道され表面化すると、手のひらを返したように知らなかった、けしからん、タレントのCM起用を停止すると言い始めている。このような状態は何か何処かで体験してきた、そうあのデジャヴ現象、既知感。太平洋戦争での日本敗北後の政治家、思想家の転向、そしてドイツのナチス残党狩り。有名なのは「アイヒマン裁判」である。

ユダヤ人の移送を指揮したアドルフ・アイヒマンの裁判を傍聴した哲学者ハンナ・アーレントは、命令を実行しただけと弁明するアイヒマンの罪を「考えないこと」と結論づけた。アイヒマンは組織の論理に従い、自分の行為を他者の視点から見ると想像力に欠けた凡庸な人間だった。そんな人間が巨悪に手を染めた。アーレントはこれを「悪の陳腐さ」と表現した。これが全体主義の本質である。私は組織では単なる一つ工程を任されたものであるという「歯車理論」。そんな「普通の人々」が劣悪な犯罪に加担する。ジャニーズ問題は社会の問題であり、同時に個人の問題でもある。このような歴史の教訓から言うならば、ジャニー喜多川という「巨悪」にはアイヒマンやゲッペルスがいたはずだ。なぜか、その人たちは今も追及されていない。しかし、私たちがそのことを知っていて今は「知らなかった」と言っている。日本の体質は戦後からも変わっていないのだ。

そんな内向きの日本、今年もノーベル賞の受賞はなかった。前回は二年前の21年であったが、毎年期待されて実現できていない。関係者は日本の基礎研究にあてられる予算の減少について指摘している。研究というものは直ぐに成果が表れるものではない。これから徐々に日本の低落がはじまるのであろうか。

さて、日本では長く忘れていたと言え、ストライキ。百貨店そごう・西武の米投資ファンドへの売却計画に反発する従業員労働組合が、先月31日から行使すると通知したストライキ。関係機関の調査によると、日本では1974年をピークに激減、労使協調路線が定着化し、名ばかりの官製ストライキくらいしか行われていない。

一方、欧州では最近、急激な物価高に苦しむ人たちが賃上げを求めるストが相次いでいる。フランスで1月、マクロン政権の年金支給開始年齢の引き上げに伴う大規模ストが決行された。ドイツ全土の公共交通機関でも、過去30年間で最大規模のストが広がった。ロシアによるウクライナ侵攻で、天然ガスや穀物の価格が急騰し、特に欧州で不満が高まっているようだ。

なぜ日本ではストが少ないか。その一因、労組が産業別に組織される欧米と企業別に分散して権利主張力が弱い日本との差であるといわれてきている。また、ストライキ、団結権は労働者の当然の権

利であるにも関わらず、その行為を悪とする風習が日本には残っている。歴史的に労働権を自らが勝ち取って得たわけではなく、戦後になって外国から与えられたものであるという意識の違いがあるのだろうか。いずれにせよこれにも外圧の力が必要である。

その、欧米でのストライキ。経済格差の広がるアメリカでは先月、バイデン大統領が全米自動車労組のデトロイトでの抗議の集まりに参加した。さすがにアメリカでも現職大統領がストの集会に参加するのは極めて異例だ。さらにそれを争うように大統領選挙をひかえるトランプ前大統領も労組を激励した。ただしトランプの主張はバイデンが進めるEV車の批判で、ガソリン車を維持し旧来の雇用を守るという労働者層の不満を取り込むという単純な目的からなので主旨は違う。アメリカでは別の産業組合が久々にストライキを実施した。映画やテレビの脚本家らの全米脚本家組合は賃上げや人工知能AIの活用制限などを求め、今年5月からおよそ五か月間ストライキを続けてきた。それがようやく下火になったところ先月にはハリウッドの俳優労組が同じような要求を掲げ60年以上ぶりにストライキに突入した。AIの導入に関して言えば、脚本家組合が争っていたのはその使用に関する権限である。つまりAIを使うことは双方とも認めるが、その使用の権限は脚本家にだけあるという

もの。映画会社が脚本家抜きにAIで脚本を書くことを制限するというもの。しかし、俳優組合の争議はそのような権限や肖像権の問題ではない。俳優そのものがAIによって置き換えられるからである。

俳優の全身を三次元スキャナーで読み込みデータ化する。そしてAIで処理するとその俳優そっくりに画像は動き出す。従来は危険な場面にだけ使用されていたらしいが、通常の演技自体にも使われそうな動性である。当然肖像権はあるが、全く別の顔を合成すれば見分けがつかなくなるし、架空の俳優も作れる。こうなると俳優そのものが不要になる。この俳優組合の問題は脚本家以上に深刻である。さて、このAI、最近再び騒がれ出した。それがChat (チャット) GPTなど

生成AIの突如とした登場が機である。生成AIとは何か。そのキー概念は「生成」、つまり創造にある。従来の人工知能AIは人間の知識の補助をするものであった。しかし、現在のAIは人間を越える知識の創造、つまり人間にできない新しい何かを作り出すことができる。過去には人工頭脳は人間を越えるかという議論が盛んになり、人口頭脳が東大受験したり、チェスや将棋の勝敗を争ったりしていた。しかし、現在は圧倒的に人工頭脳の勝利が確定している。さらにその技術はお掃除ロボットなどの家電から自動

車の自動運転などから医療分野、芸術部門まで様々な世界に広がってきている。それに従って失業の問題は深刻である。

第一次産業革命での機械による大量生産はブルーカラーの失業を加速させたが、今度はホワイトカラーの番だ。

AIの発達に伴うより深刻な問題はAIの悪意の使用である。従来からあるフエイクニュースはAIによりさらに巧妙化され流される。来年実施のアメリカ大統領選挙には実践的に使われる可能性が指摘されており、それはもうすでに始まっているかもしれない。これらは人間のAI使用に関する倫理問題であるが、これにその先にはAIが人類に反抗するというSF小説の世界が実現する可能性も出てきている。もう夢の世界でなく悪夢の世界である。

さて、このようなAI。どのような仕組み働き、なぜそれが急激に発展したのか、そして何が問題なのか。次回からはしばらくAIを考えてみたい。本号はその「前夜」である。

これが「AI前夜」であるというのなら、本号で最初「ジャーニズ性的虐待」は非常に人間的、動物的なものの象徴になるのか。かれらが人間であったからこそ起きた問題なのか。それとも「人間」であるということを実証するために行われたのか。「人間—AI」の間にはなにがあるのか。さらに哲学してみよう。

## 大峯奥駈道 (71)

下村 嘉明

### 体験型人間学 21

六甲山から住吉・魚津と一直線に作られた雨水の排水溝修理がされている地上での警備の仕事をしてきた時だ。改修作業は地下で行われているので警備の仕事もあまりなく時おり通る人や自転車排水溝の入り口に落ちないように注意していた時に、阪神高速道路の下の駐車場で掃除をしている婆さんを見て、妙に丁寧に掃除をしているのに気にかかった。掃除の婆さんなら、とつとと終わらせてしまような所も丁寧に手を抜かずに行っている。草だけではない、土も丁寧にゴミ袋に幾つも詰め込み自転車にのせている。

通りかけた隣接する病院の若い女の子たちに声をかけて、ごみの置き場を聞いている。場所が聞いて分かり、喜んでゴミを運んでいく。それを幾度も繰り返す。私は、婆さんを見ながら、普通の婆さんではない。アルバイトでやっているよな人ではない。何かこれまで経験したことがないような事を、婆さんはしている。堤防などで小さなポリ袋を持ってゴミを拾いながら散歩をしている人は何度も見かけたが、これほど熱心な人は見かけたことはない。この婆さんは何者なんだ？

休憩の時に、私は婆さんの自転車の近くまで行き話しかけた。ほんの数分の立ち話だったが、婆さんは、ある所へ行った時に、神の啓示を受け住吉地域の掃除をする様になった。

雨の日以外は、毎日掃除に出かける。誰に頼まれるわけでもなく、お金をもらう事もなく10年間続けて、今80歳。彼女に啓示を与えたのは、天照大神だという。

私は、妙に納得して婆さんを見直した。

## 新型コロナウイルス禍愚考

(その37)

明石 幸次郎

「どうしたら幸せになれるんですか？」というホームレスになろうとしてなりきれなかった60歳代の女性の問いに対して、私が発した言葉がこの女性の気持ちに寄り添ってココロに響いたかは、10ヶ月程経った今も自問自答しています。人に対してこうすれば幸せになれるかは、中々言えるものではないですが、偉人の幸せとは何かの言葉を探していたらアーネスト・ヘミングウェイが「幸せとは恐らく釣りと同じで、目的と言うより



もプロセスなのでしよう」と言っています。幸せを追求する過程での努力？とか精進？などが大事だと言う事ですか——。日々楽しく過ごせたらそれが、結果として幸せに繋がるのでしょうか？

では、楽しく過ごすには、色々と資源があるものです。その資源はまず、その人が心身に健康、正常な状態にあることです。

その次は、安心できる環境、精神的自由、社会的インフラがあることです。それは社会が平和で争いがなく、どこでも自由に行動出来て、自由に発信が出来るということです。パンデミックの状況では自由な行き来とか、人に会つての会食などが制限されて、大変な不自由さを感じましたが、これは本当に不幸な状態でありませぬ。

その他は、60歳代の彼女に無かったある程度のお金、住居などの物的資源です。これがないと、マズローの欲求5段階の第1の生理的欲求、第2の安全欲求が満たされませんので、幸福な気分にはなれません。そのために政府は全ての国民に憲法第25条で生存権を保障しています。

彼女は生活保護の受給を申請しているが中々、下りないので、一層のことホームレスになろうと追いつめられたようでもあります。何か特別な事情があるようですが、最低限の生活保護を受けないと、生理的欲求、安全欲求が満たすことが出

来ない困難な状態では、誰しも幸福感を得ることは難しいです。

幸せになるためには、まずは、健康を含むこのマズローの欲求の第1と第2段階の欲求を満たすのが基礎的、必要条件であると言えます。

しかし、それを満たせば人は幸福だと言えるのであろうか？

それだけでは、中々、幸福感は感じられないようです。次の第3段階の社会的欲求(家族、仲間、所属、愛、第4段階の承認欲求(他者、社会から認められる)第5段階の自己実現欲求などの精神的な欲求も満たされないと幸福感を感じられないのが人と言う難儀な動物の存在なのです。

そして、その上、マズローは第6段階の自己超越欲求を挙げています。

それは、世界から貧困をなくし、戦争をなくす。ボランティア活動で社会を良くしたい。自分の資産や労力を使って困っている人を助きたいなどの欲求です。この1〜6段階の欲求を満たすよう行動する過程において人は幸福になれ、幸福感を感じるのかも知れません。それを実践することが自己満足の幸福を得る道ではないかと、やっと自分なりに「幸福とは」と思える次第です。

最後に、幸福論を書いた哲学者アランは「私は、幸せになるための努力は決して無駄になることはない」と言い哲学と共に生きる人生が最も幸福であると又、

与えられるのを待っているのではなく、自分から積極的に行動すること、それが幸福への道だと言っています。

## オクラの山たより (85)

### 困了生

#### 一

前回、少しふれた故郷柏原で唯一の一家の門人中村二竹のことから話をはじめます。

中村二竹は柏原宿きつての豪商であった中村与右衛門の息子である太三郎です。父も平湖という俳号をもつ趣味人でしたが、太三郎も北国街道沿いの宿場で江戸の風を吹かせるちよつとカッコイイ若者でした。この太三郎が住む柏原宿はその中央に宿場に多くの檀家を持つ明専寺という寺がありました。この寺の住職十八世秀意が十九歳の美貌の妻ミエと一歳の娘を残して二十九歳の若さで急逝したのです。

このミエに恋い焦がれた二人の男がいました。一人は檀家惣代を務めていた大地主で酒造業も営んでいた大富農の清水斧右衛門。斧右衛門はミエにかなり接近

し恋文まで交わすまでになつていました。しかし、焼き捨てたはずの恋文が斧右衛門の妻に見つかり、あわれ、斧右衛門の恋は頓挫したのでした。

もう一人の男が中村太三郎です。先ほど述べたように当時の言葉で「イナセ」な若者であった太三郎にまだ若いミエの心もときめいたのであろうか、二人は相思相愛の仲へと発展します。二人は何とか一緒になろうとしましたが、そこに「待った」をかけたのが寺を預かるミエの姑(実はミエの伯母でした)と明専寺の親戚筋でした。明専寺の血脈たるサチを残して再縁するなどもつてのほかと猛反対の嵐。ミエは太三郎との恋を貫き結婚を強く望んだのですが、所詮はかなわぬ恋でした。

同じ頃、村人たちの間では明専寺の後家さんと太三郎の色恋沙汰、つまり寺の後家さんと公然と不義密通をしていたという噂は急速に広がって、太三郎は追いつめられて村の中に身の置き所がない状況となり、一七九九(寛政十一)年、ついに江戸に出奔します。

江戸に出た太三郎を慰謝し面倒を見たのが、業俳(プロの俳諧師のこと)の一茶でした。太三郎は一茶の門人となり俳名を二竹としました。その後、太三郎は帰郷して妻を迎え家庭を持ちますが、一八一(文化八)年、突如としてどこかへと消えて以後行方知れずとなりました。家を捨て家族を捨て故郷を捨てて業

俳二竹として生きることにしたのでしよう。業俳一茶から百姓弥太郎に変身して、柏原宿に舞い戻り「俗物」と非難されても仕方のない師匠の一茶とは真逆の「真の俳諧師」であったかもしれませぬ。

太三郎と相思相愛であったミエは従兄弟の秀栄と結婚し、一八〇四（文化元）年に秀栄の長男を産んでいます。なお、前回に紹介した「熟談書付之事」を一八一三（文化十）年に書いた秀円はミエと秀意の娘サチの婿でした。

## 二

さて、一八一三（文化十）年、遺産相続をかなり強引ではあったのですが、無事に終えた一茶は柏原宿で定住していくこととなります。住いは父の遺言により父親所有の家屋敷を半分に分け、北半分が一茶、南側が弟弥兵衛のものとなり、間口九間の家を仕切って義母・義弟夫婦と同じ屋根の下で暮らしました。

自分が持つ資産と住いが決まれば自分のあとをつぐ子どもが欲しくなるものです。さっそく花嫁捜しとなりました。もちろん一茶は独身主義者ではありません。次のような一茶五十歳の句もあります。

① 走る雉（きじ）山や恋しき妻ほしき

1812（文化九）年

この句は「走って行くキジ。山が恋しいからだろうな。オレは妻が欲しい」という句意です。「走る雉」は一茶の思いとは直接関係がありませんが、その切実さが伝わってきます。その率直な表現が文化文政のころの句としては新しく感じられます。

前にも述べたように五十歳を過ぎた一茶は歯周病で歯はほとんど残っておらず、おまけに次の句を詠み身体のままならぬことを訴えています。

② かすむやら目がかすむやら

今年から 1813（文化七年）

③ かな釘のやうな手足を秋の風

1812（文化九）年か

一茶はいままでいう白内障と軽い脳梗塞に悩まされはじめていたらしいのです。手足の不自由な症状はさらに進んで、

④ 榎（えのき）まで今年は行かず雪つぶ

て 1817（文化十四）年

雪が降り出すと毎年してきた雪投げは、今年、ついに家の前の榎までにも届かなかつたと老いの身を嘆くようになりま。さらに進んで、たぶん晩年の一茶は高血圧にも悩んだようで次の句にもそれはあらわれています。

⑤ 夜の霜しんしんと耳は蟬の声

1821（文政四）年

「蟬の声」つまり高血圧に起因する耳鳴りです。ひどい耳鳴りで眠れない夜が続いたことでしょうか。

こうした身体的な事情をかかえた一茶のころへ若い花嫁が来てくれました。一八一五（文化十二）年四月十一日のことです。一茶五十二歳の春でした。花嫁は親子ほども年齢の違う二十八歳の「菊」でした。

菊は野尻宿の新田赤川の豪農であった常田家の娘でした。仲人は叔父の宮沢徳左衛門。徳左衛門は常田家の親類であり

宮沢家は一茶の実母の実家でした。菊は事情があつて嫁ぎ先からもどされた女性ではなく独り身でした。この時代、農村

の女性は武家や商家の女性に比べ都市へ奉公に出ているという事情で結婚年齢が遅くなり二十代後半で初婚というのは珍しくはありませんでした。菊もそうした女性の一人だったのかもしれませんが、次の句は結婚した折りの一茶の自画像です。

⑥ 五十婿天窓（あたま）をかくす扇か

な

五十歳の婿が真っ白になった頭を隠す祝いの扇よ、という句意です。照れ隠しで顔を隠そうとしたが思わず顔を隠してしまつたという「頭隠して尻隠さず」を踏

まえての句で参加者の笑いを誘おうとしたのでしよう。

また、始めて妻を迎えた感想を一茶は次のようにも記しています。

五十年一日の安き日もなく、ことし漸（ようやく）く妻を迎へ、我が身に つもる老いを忘れて、凡夫の浅ましさに、初花に胡蝶の戯（たわむ）るるが如く、幸あらんとねがふことのはずかしさ、あきらめがたきは業（ごう）のふしぎ、おそろしくなん思ひ侍りぬ。

「俳文拾遺」255（文化十二年四月）

「我が身につもる老いを忘れて、凡夫の浅ましさに、初花に胡蝶の戯（たわむ）るるが如く、幸あらんとねがふ（我が身に積もつていく老いを忘れて、凡夫の浅ましさに、初花に胡蝶がたわむれるごとく幸福になるように願う）」には五十二歳での結婚が一茶にとって心底うれしかったことが分かります。有名な

⑦ 雪とけて村いっばいの子どもかな

という句は一茶の結婚と前後して詠まれた句です。春の喜びとともに自分も子どもが持てるという期待もこの句にはこめられているでしょう。自分も人の親になれると目を細めて子どもらを見ている一茶を想像するとこの句の鑑賞もいささ

か変化しませんか。

### 三

菊との結婚から二年たった一茶は次の句を詠んでいます。

⑧ こんな身も拾ふ神ありて花の春

1817(文化十三年)一月

一茶は浮き浮きした気分であったのですが、一方の人一倍働きの菊は大変でした。門人たちの指導で外泊の多かった(記録によれば一茶は一八一三年から一八二五年までの間、年平均六十三%、つまり年間二百六十日ほどは俳諧指導のために門人たちの家を泊まり歩いていました)一茶の留守をまもり、家事から農作業まで菊は女手一つでやっていたのけました。さらに菊が三十七歳で亡くなるまでの九年間に菊は三男一女の子を生んでいます。しかし、この四人の子どもはすべて乳幼児のころに亡くなりました。

長男千太郎は發育不全のため生後二十八日で、長女さとは痲瘡のため一歳二ヶ月で、二男石太郎は生後九十六日で窒息死(菊が誤ってまだ首の据わらぬ石太郎をオンブして窒息死させた)し、菊の死の半年後に三男金三郎は下痢による衰弱のため一歳九ヶ月で死去しています。

現代の感覚からすれば九年間で四人の子を生み、そのすべてを死なせ、自らも

死亡するというのはなんとという苛酷な状況なのだろうかと思つのですが、一茶には何としても子どもが欲しいという強い欲求がありました。

遺産争いの末に、ようやくのことで一定の資産を手に入れ、菊と結婚した一茶とすれば自分の子どもに一茶の家を継がせたいという気持ちが一茶強かったのは容易に想像がつかれます。また遅い年齢で結婚した菊にとつても子を産むことは妻のつとめとして強く意識されていたことでしょう。子どもが欲しいというのが夫婦の共通の気持ちであったとしても「自分の子どもが欲しい」とより強く持つていたのは一茶でしょう。それを裏付けるのが「七番日記」です。

一茶は生涯を通じて毎日の出来事をメモして三十代に書き始めた「寛政句帖」から亡くなる六十五歳直前の「文政九・十年句帖写」までが残っています。その一つがこれから話題にする「七番日記」です。

身の回りの出来事を記録し続けた理由は一茶の性格だけではなく彼の俳諧師としての暮らしに欠くことができないことだったからです。つまり、江戸や各地の事件を記録し、別の土地に行ったときに情報として伝えることが必要だったからです。記録された情報の中で目立つのは「去ル五日、沓野ノ男廿二、女廿三、心中死ス」といった男女の情交に関わる事件が多いことです。どうやら一茶は女

と男の関係に深い関心を寄せていたらしいことがうかがえます。

今とりあげる「七番日記」は一茶の四

十八歳から五十六歳までの間の日記です。この日記がよく話題になるのは毎日の出来事だけではなく夫婦二人の性交渉や妻である菊の月経の記録を細かに記録していることです。たとえば一八一六(文化十三年)年八月六日の記事に「菊 月水」とあり、これは菊が月経であったことを示しています。そして、菊の月経の終わったと考えられる八月八日に「夜五交合」という記録があります。これは夜に五回夫婦で交じわったことをしめしています。さらに「黄精(おうせい)和名ナルユリ

「姪羊霍(いんようかく)和名イカリクサ」という強精剤・精力剤となる薬草を採集するために頻繁に山に行ったことも記録されています。一茶の努力、思うべしでしょう。

最も詳しい記録の残る一八一六(文化十三年)年八月の記録では八日から二十一日の間(記録があるのはその中の九日間です)に夫婦で「交合」すること三十回にもなりました。

余談ですが、ここから「一茶性豪説」、「一茶荒淫説」が出てくるのですが、必ずしもそうはいえません。一茶も読んでいた当時の医書「神秘天命伝」に次の記述があります。

(子は) 月水の後の、七日に、は

らむものなれば、十四日を過ぎて、ことを行えば、子なし

この記事の内容と三十回に及ぶ性交渉が菊の月水終了後の八月八日に始まって「子なし」とされる二十二日の前に終わっていることは符合しており、一茶は医学書の示すとおり交合を繰り返した、といえます。

一茶と菊との交合は快楽を求めてということは否定はできませんが、第一義的には子宝を求めての交合といつていいでしょう。しかし、この二人の思いと努力にもかかわらず菊はこの年に妊娠することはできませんでした。

そうした事情は理解できても、この一茶と菊の激しい性交渉ぶりを見ると「あの『七番日記』の有名な交合の記録を読んでいると、教科書の一茶と性交の数も必死になって記録している一茶とがどうしても結びつかない」といった井上ひさしだけでなく筆者も思わず「引いて」しまいます。ああ、この一茶の一筋縄では行かぬ多面性。人間というのはつくづく面白い存在だなと考えさせられます。

なお、一茶が妻の月経をマメに記録し続けたのは一年の六割は家を空けていた一茶です。菊の産んだ子が本当に自分の子であるかどうか確かめる必要があったためではないかと近世史家の沢山美果子はいつています。たぶんそうでしょう。

さて、一八二二(文政二)年の正月に

⑨ 目出度さもちう位もおらが春

という有名な句を詠んでいます。

浄土真宗の門徒でもあった一茶は他力本願の考えにしたがい「今年の春もあなた(仏様)任せに迎える」のだとして「目出度さも……」の句を詠んだのでしよう。冒頭にあるこの句によってそう名づけられた「おらが春」は文政二年の出来事などを記した日記体の句文集で、内容・構成・文章とも最も充実した作品であるとされています。

文政二年に一茶の身边で起きた最大の事件はこの年に満一歳となった長女さとの死です。「おらが春」に流れる通奏低音は長女さとへのあふれるばかりの愛とその死の悲しみでした。

文政二年正月、長男の死の二年後に生まれた長女さとが年を越えて二歳(当時の年齢は数え年)となりました。今でいう生後七ヶ月です。首もすっかりと据わりそろそろハイハイをやるころでしょうか。可愛い盛りです。そのさとの様子を「去年の五月に生まれたる娘に、一人前の雑煮膳を据ゑて」の前書きの後に

⑩ 這(は)へ笑へ二つになるぞ今朝から

という句を一茶は詠んでいます。一茶がニコニコ顔で自分の娘の顔を見ている姿が見えるようです。次の文章にもそんな一茶の気持ちがあがえます。

人の来たりて「わんわんはどこに」といへば、犬に指さし、「かあかあは」と問へば、鳥に指さすさま、口元より爪先まで、愛嬌こぼれて愛らしく、いはば春の初草に胡蝶の戯るるよりもやさしく(「優美に」の意)なん覚えはべる。

もはや「親バカ」ともいえる書きぶりですが、先に述べたこの子ができるまでの二人の「努力」から考えれば一茶と菊にとっては当然の気持ちだったことでしょう。その気持ちからすれば子どもが夜泣きをしても気にならなかったのでしょうか、そこで次の記述です。文章の後につけられた句にも二人のうれしさがあふれています。

(子どもの泣き声がすれば子が目を覚ました合図と決めて、すばやく抱き起こして)うらの畠に尿(し)とやりて、乳房あてがへば、すはすは吸ひながら、むな板のあたりを打ちたたきて、にこにこ笑ひ顔を

作るに、母は長々胎内の苦しみも、日々襁褓(むつきおしめのこと)のきたならしきも、ほとほと忘れて、衣の裏の玉を得たるやうに、なでさすりて、ひとしお喜ぶありさまなりけらし。

蚤(のみ)の迹(あと)かぞへながらに添乳(そそぎ)かな

「衣の裏の玉を得たる」とは「この上ない宝」という意味であり、「法華経」にある「人が各自に備わっている仏性に気づかないのは、衣の中に縫い込まれた宝を知らないのと同じ」という言葉から出てきた表現です。一茶夫婦に限らず久しく望んでやつと生まれた子に対する親の気持ちはみな同じです。

このさとの死は六月二十一日午前十時のことでした。菊は「死に顔にすがりて」泣き続け、一茶は「行く水のふたたび帰らず、散る花の梢にもどらぬ」後悔はせぬないことと思っても思い切れず次の句を詠んでいます。

⑪ 露の世は露の世ながらさりながら

子を失った親の正直な気持ちでしょう。「おらが春」にはこの一茶の句に続けて彼と同じように子を失った先人の句や歌をいくつか記しています。

娘を葬りける夜

・夜の鶴土に蒲団も着せられず

其角

子をうしなひて

・とんぼ釣りけふはどこ迄行た事かな

加賀の千代女

・人の親の心は闇にあらねども

子を思ふ道に迷ひぬるかな

藤原兼輔卿

二人目の子のさとも亡くなった後、一八二三(文政六)までの四年間に菊が次々と産んだ次男石太郎、三男金三郎と亡くなって妻の菊も亡くなりました。一茶以外の家族の者は皆あの世へと旅立ち、一茶は十年前と同じく一人ぼっちの老人となりました。おまけに次男が生まれた直後に中風にかかり歩行も不自由な身の上になっていました。

ここまで書いてくると継母との関係、遺産相続の争い、病苦、そして結局は恵まれなかった家庭生活と一茶の生涯は不遇のうち終わつたと考えてしまいますが、小説「ひねくれ一茶」を書いた田辺聖子の見解は違います。実は夫婦仲はむつまじいものであったのではないかと、この田辺さんの説を次の句から紹介してみます。

⑫ 我が菊や形(なり)にもふりにもかまはずに

⑬ 山の菊曲がるなどは知らぬ也



⑭ 寝た犬にふはとかぶさる一葉ひとはかな

⑮ 猫の子のちよつと押さえる木の葉かな

⑯ 桐の木やてきばきと散つてつんと立つ

⑰ 女郎花からみ付きけり皴足(しわあし)に

菊はよく働きました。実家で弟や妹の面倒をよくみてきたからです。⑯の「形にもふりにもかまはず」という詠みぶりには「なんとまあ、骨惜しみせず働く女だろ」という讚歎と愛情が感じられます。⑰の句の「曲がるなどは知らぬ」にはまっすぐで一本気な女性だった菊の姿を一茶は詠んでいます。そして、菊もまた小さきものを愛し⑭や⑮のような句作をする一茶の優しさを実感的に理解していたのではないかと田辺さんはいっています。

遺産分けに際してはおのれの利益を執念深く追求し、金銭勘定に細かく、自分の後を継ぐ子どもが欲しいと強精剤まで求めて交合をしつこく繰り返す。そういう面だけから見れば見るもイヤな老醜の姿をさらしたジジイ、強欲でエロイ爺さんといわれてもしかたがないでしょう。しかし、菊から見れば一茶の性根は小動物好きの心優しい人だと思えたのではないかと田辺さんはいうのです。菊は一茶の老醜のうわべだけを見て忌避せず、一

茶の心底にあるやさしみやユーモアをよく理解していた妻であり女性であったのだと。

そして、菊の姿を詠んだと見られる⑯と⑰の句には、一茶も老いた自分に優しく接して尽くしてくれる菊に涙ぐんで感謝している彼の心がよく現われていると田辺さんはいっています。

表面的には問題点のある夫の心底をよく理解し毎日明るくテキパキと働く妻とその妻を心の底では讚歎し感謝もしている夫。一茶と菊は幸福な夫婦であったのではあるまいか、と田辺さんはいうのですが、さて、いかがでしょうか。

## 五

話を元にもどして、菊の死の翌年に一茶は飯山藩の下級武士の三十八歳の娘雪と再婚しますが、二ヶ月余りで離婚となりました。もう一言いえば新婚の夜から一茶は一ヶ月以上も門人の家まわりに出かけたので、一茶が離婚するまでの間に新婦と一つ屋根で暮らしたのはわずか六日にすぎません。雪は仲人から江戸で修行した俳諧の宗匠と聞いて一茶のことを洒脱な風流人とも思っていたのでしよう。ところが実際に会ってみれば一茶は歯の抜けた、しかも足腰の不自由な中風病みでときどき尿尿も漏らすという爺さん。軽輩とはいえプライド高き武家の娘。「やっつられないわよ」と雪は飛び出し

たのでしよう。考えればもともと無理な結婚でありました。もちろん子どもはなし。一茶が見舞われた不幸をもう一ついえば雪と離婚する直前に一茶は二回目の中風を起こしています。今度は「不言ノ病起ル」で言葉まで不自由になりました。家に帰っても誰もいません。門人の家から家へと手渡され、十二月になってやつと柏原の家に帰り詠んだ句が「寒空のどこで年寄る旅乞食」です。一茶はまたひとりぼっちになりました。翌年、六十三歳の一茶が詠んだ次の句にも彼のこの時期のさびしさがうかがわれます。

⑱ 淋しさに飯を食ふなり秋の風

## 六

雪と離婚して二年後の一八二六(文政九)年、六十四歳の一茶は越後国二俣村の宮下やをと三度目の結婚をします。やをは三十二歳。やをにとつては自分の年齢の二倍の六十四歳のお爺さんとの結婚です。しかし、やをが承知したのは、前年生まれた倉吉という連れ子があつたからでもあるでしょう。

やをと結婚した翌年、柏原宿は大火に襲われます。一茶の家も類焼して一茶は門人の家を転々とした後、焼け残った屋敷の土蔵を仮宅としてそこに住むことになりました。その火事とき、やをは脚の不自由な一茶を背負い、子どもの手をひ

いて、必死に逃げのびました。三度目の結婚から一年余りたった十一月十九日の朝、一茶は三回目の脳卒中発作を起こし、そのまま眼を開くことなく亡くなりました。

やをは大火後に妊娠したらしく、あくる一八二八(文政十一)年四月に一茶の子のやた(明治六年、四十六歳で没)を生んでいます。このやたによって一茶の家系は継がれて今に到るも一茶の子孫は柏原に健在でおられます。

自分の後を継ぐ子がどうしても欲しいという一茶の悲願は彼の死後に実現したこととなります。

以下、まったくの余談ですが、最近気づいたことを一つ。

「善の研究」で有名な哲学者西田幾多郎は哲学の著作のほかに多くの短歌や俳句、漢詩などを残していますが、記録に残る限り西田幾多郎が最後に詠んだ俳句がおもしろいです。

一九三七(昭和十二)年十月初めの日記に書かれた句です。

・土蔵すまひ何しに来たと一茶の云ふ  
・秋ひよりけふは一茶も留守の様

一茶と同じく西田幾多郎も八人の子どものうち五人までも生前になくし、妻(妻の寿美さんは四十九歳で亡くなっており、その時、西田は五十五歳でした)とも死に

別れています。そのあたりの事情で同じような境遇であった一茶に共感したのか、または門人まわりに忙しかった一茶の日常や最晩年の一茶が土蔵で暮らすことになったことに興味を持ったのか、その理由はわかりません。哲学者西田幾多郎が寄せる小林一茶への関心のありどころ。気になることではありません。

## 支離滅裂 癡

### short & short

y・s

#### エリートたちの弱さ

先月、久しぶりの同窓会に出た。大学時代のあるサークルの同窓会である。私は、在籍期間も短く参加する資格もあるようなないような立場なのだが、芥川だよりに協力してもらっている幾人かの手前参加することにした。

参加して、驚いたのは、参加者の発言の面白さである。確かに、有名大学を卒業し大手の組織に入りその流れのまま定年を迎え子会社の役員を務め悠々自適の日々を過ごしている様子はわかるのだが、社会を少しでも良くして改革しようとする姿勢は全く見られない。

私は参加したことを悔やんだ。私が来る場所ではなかったのだ、彼らと私の生き方は全く違うのだ。学歴を盾に定年まで無難な人生を歩んできた彼らとは、私の生き方は違うのだ。いくら話し合っても分かり合えない生き方なのだ。確かに、学生時代は、左翼的でマルクス・エンゲルスなどを論じていたが、就職と同時に転向し資本主義のしもべとなってしまった。

彼らの、論理はあまりにも自分勝手に、大きなシステムの中での受益者の一員をなしているから、根本的な体制批判など出来るわけがない。いわゆる勝ち組の論理に浸っているから、私が、何を言っても彼らには通じない。いや、通じるような人は参加していないだろう。

政治家の責任を問う声が多いが、エリートたちの責任も大きい。だが、エリートたちは姑息な人種が多く自分の非を認めないだろう。

福島の原発事故の直後、知り合いの先輩に電話した。先輩は東芝で原発の仕事をしていて、電話に出た彼は「下村くん、人間の業だよ、なんともならん」といつて電話を切った。

なんともやるせない気持ちを持ちながら、直後から「芥川だより」に原発特集を投稿者にお願ひし4カ月間原発反対特集を掲載した。

初めて福島原発反対特集を発行した日の事を思い出す。店の前に芥川だよりを

並べた時に、生卵が投げつけられるかと心配したが、古参の共産党員の爺さんが今度の勉強会で使うと言って持っていかれたことを思いだす。

原発事故の反対報道は「芥川だより」は早かったと思う。いくら小さなミニコミ誌でも公的な出版物である。記事の内容には公的な責任が伴う。裁判で訴えられれば、私の資産では足りないが、あえて私は、世の中の人に訴えたい事を今後書き続けたい。

エリート諸君、もう一度、己の人生を振り返り、己の利益に走ったことはないか。よくよく考えてほしい。

## 隠された歴史(60)

満田 正賢

今回から次号にわたって、「隠された歴史(5)」などで何度も取上げてきた九州年号(古代逸年号)の白鳳―朱雀―朱鳥

―大化のそれぞれの期にいた倭国(後期九州王朝)の天子とはいったい誰なのかということについて、考察を深めたいと思います。九州年号は七〇一年の大宝年号建元まで、白鳳―朱雀―朱鳥―大化という、日本書紀には一部しか記されていない、また近畿天皇家の各天皇の即位とは異なる年次で繋がっています。それに関して古田史学会員諸氏は過去様々な考察をくわえています。今回はそれに私の新しい考察を加えて、白鳳、朱雀、朱鳥、大化が誰によってどのような理由で定められたかについての仮説を立てました。文中で名前を記載した諸氏はいずれも古田史学会の会員です。なお、九州年号の年代については、古田史学会が一番九州年号を正しく伝えているであろうと考えている『二中歴』に記載された年代を基本において考察しました。

\*『二中歴』は鎌倉時代に成立したとされる事典で平安後期に成立した『掌中歴』と『懐中歴』の内容をあわせて編集したものとされています。

・白鳳(六六一年・斉明七年)六八三年・天武十二年)

白鳳期の天子(倭国王)は、天智(中大兄)の皇后となった「倭姫王」であると推定します。倭姫王は日本書紀では「やまとひめ」と読まされていますが、「わのひめおう」という読み方をすることも可能です。

中大兄は斉明崩御のあとすぐには即位せず、実に七年間も摂政として政治を行

ったことになっています。天智七年(六六七年)になってやっと即位し、この時に初めて皇后を立てます。皇后となった

「倭姫王(やまとひめ)」は古人大兄(ふるひとのおおえ)皇子の娘であると日本書紀に記されていますが、この記述には

大きな疑問があります。古人大兄皇子は舒明と蘇我馬子の娘・法堤郎媛(ほてのいらつめ)の間の子であり天智(中大兄)の異母兄弟ですが、孝徳元年九月に謀反の疑いがあるとして中大兄に惨殺されているのです。その時に「その妃、妾は自

経して死んだ」と日本書紀に記されています。仮にその娘が生き残っていたとしても、天智(中大兄)の皇后となる資格を持った女性ではありません。しかも天智崩御の際に、大海人皇子(後の天武)は「天下は挙げて皇后にさづけ、大友皇子を皇太子に立てるよう」とまで進言しています。この天智の皇后「倭姫王」と

「謀反をおこした古人大兄皇子の娘」とはとうていイメージが合いません。ところで天智即位の二年後の六七〇年に、倭国から日本国に国名が変更されたという記事が「三国史記・新羅本記」に記されています。国の呼び名を変えたという記事は日本書紀にはありません。

西村秀己氏は「倭姫王」は倭国(九州王朝)の女王であり、倭国(九州王朝)の女王と婚姻することによって天智は「倭国王」たる資格を得て、国名を新しく「日本」に変えたのではないかと考察しています。白鳳年号と倭姫王の存在時期とは重なっており、白鳳年号は倭姫王が倭国王として即位した時、

または治世の間に改元されたと考えます。

天武と白鳳年号

天武(大海人)は天智の危篤の場に臨んで、天下は皇后(倭姫王)に授けるべきだと述べた、と日本書紀は記しています。このことから倭姫王が九州王朝の天子(倭国王)であった可能性は高いと思われま。それでは、壬申の乱に勝利した天武は、なぜ新しく王朝を建て年号を建元しなかったのでしょうか。以下「隠された歴史(20)」でご紹介した年表を再掲します。

六六〇年(斉明六年)…百済滅亡

六六三年(天智二年)…白村江の敗戦、唐が旧百済地に五つの都督府を設置

六六四年(天智三年)…唐が旧百済の熊津都督に百済前王の子を任じる唐が日本に郭務悰(かくむそう)を派遣

六六五年(天智四年)…唐が日本に劉徳高(郭務悰を含む)を派遣

六六七年(天智六年)…三月近江遷都。十一月唐が司馬法聡を派遣したので、境合部連石積らを筑紫都督府に送る

六六八年(天智七年)…正月天智即位、二月倭姫王を皇后とする高句麗滅亡、唐が旧高句麗地に九都督府を設置

六六九年(天智八年)…河内直鯨らを唐に遣使、唐が郭務悰ら二千人を派遣

六七一年(天智十年)…十一月対馬国司が筑紫大宰府に使いを遣わして以下を奏上

「沙門道久・筑紫君薩野馬・韓島勝姿婆、布師首誓の四人が、郭務悰ら二千人・船四七艘に連れられて比知島に停泊しているが、防人が射戦するのを恐れて、あらかじめ道久らを遣わして来朝の意を開陳させた」

十二月天智死去

六七二年(天武元年)…三月郭務悰らが使者から天皇の喪を聞き哀悼の意を表明五月郭務悰らに甲冑弓矢を賜わる。郭務悰帰国

六月壬申の乱勃発

六七六年(天武五年)…新羅は六七〇年から唐の朝鮮支配政策、すなわち都督府による羈縻(きび)政策、唐の属国として唐に従わせる政策に反発していたが、この年、唐を朝鮮半島から完全に駆逐した

この年表では郭務悰の動きが重出しているように見えますが、天智死去直前の対馬国司の奏上記事を作成、あるいは天智三年又は天智四年の出来事を天智死去直前の出来事として挿入したと考えると一連の流れが理解できます。天智六年記事に出てくる「筑紫都督府」という言葉がポイントです。すなわち唐は郭務悰をトップとした占領軍を筑紫に送り込み、

朝鮮半島の占領政策と同様に大宰府に「筑紫都督府」を置いたと考えられます。筑紫都督については、旧百済の熊津都督に百済前王の子を任じたように、日本人を都督に任じたのではないかと考えられます。壬申の乱直前に郭務悰らに甲冑弓矢を賜わったという記事は、通常では考えられない行為であり、郭務悰が帰国前に、後に残る筑紫都督に甲冑弓矢を授けたという記事の裏返しだったのでないでしょうか。すなわち、天武側が郭務悰から与えられた武器を手にして近江朝側との戦いに踏み切ったということが年表によって想像出来ます。これが壬申の乱の隠された真実ではないでしょうか。

茂山憲史氏は筑紫君薩野馬の帰国後すぐに壬申の乱が勃発し、以後筑紫君薩野馬の名前が消えることから、「筑紫君薩野馬」大海人皇子「天武天皇」という説を提示しました。又服部静尚氏は、「天武」筑紫都督「説を展開しています。私は服部氏の「天武」筑紫都督「説を支持しています。天武が筑紫都督であったと考え、壬申の乱の後、自分は政権の実権を握るが、筑紫都督は形式上唐の臣下ですので、名目的な倭国王の地位は別の人物に与えて、倭国王の年号改元を黙認するという判断をした可能性があまりあります。その結果として、倭姫王が白鳳年号期の天子として存在しえたと考えます。

通説の中にも「倭姫王」が天皇であっ

たと考察している学者はいます。喜田貞吉氏は、『中天皇考』において、万葉集に「中皇命」、野中寺弥勒菩薩銘文に「中宮天皇」、大安寺伽藍縁起并流記資材帳に「仲天皇」という、いずれも日本書紀にない天皇の存在を示す記載があり、これは「倭姫王」が一時期天皇であったことを示しているという仮説を立てています。

又、日本書紀では孝徳天皇が建てたとされる難波宮は、「中大兄らが難波の宮を引き上げ、孝徳は失意のために亡くなった」という日本書紀の記述に反して、実際には拡張を続けていたことが考古学的に明らかになっています。倭国王たる倭姫王は、壬申の乱の後、近江宮を離れて難波宮に戻っていたと考えられます。

・朱雀（六八四年・天武十三年）六八五年・天武十四年）と朱鳥（五八六年・朱鳥元年）六八四年・持統八年）

白鳳年号の終了が天子の交代を意味するのかどうかですが、日本書紀には、天子の交代を匂わせるような記述は見えません。日本書紀には朱鳥年号は記載されていますが、天武が崩御したのは朱鳥改元の後です。

古田史学の中では、それぞれの年号について、瑞祥改元であったという見方と凶事に際してその影響を断ち切るための災異改元であったという見方で様々な考察がなされていますが、天子の交代によ

る改元であるという見方は示されていません。

まず、瑞祥改元に関しては、阿部周一氏が、鹿児島県入来院家文書の中の『日本帝皇年代記』に「朱雀、依信濃国上赤雀為瑞」「朱鳥、依大和国上赤雉也」という、いずれも瑞祥改元を示す記事があるということを見えています。

又、朱雀については、日本書紀天武十三年（九州年号朱雀元年・六八四年）に、「春正月二日、百寮が朝廷を拝した。筑紫太宰丹比真人鳴らが、三つ足の雀を買した」という記事があります。倭姫王が健在で、故郷である筑紫から三つ足の雀が献上されたことを多いに喜んだことによる瑞祥改元ではないかという解釈も可能です。

一方、災異改元に関しては、正木裕氏が「朱雀改元は白鳳地震によるものであり、朱鳥改元は難波宮焼失によるものである」という見方を示しています。

日本書紀には朱鳥元年一月十四日に「酉の時に、難波の大蔵省が失火して、宮室がごとごとく焼けた。『阿斗連葉の家が失火して引火して宮室に及んだのだ』というものもいた」という記事があります。

この難波宮消失が災異改元に踏み切らせたという説は極めて有力ですが、私にそれに加え、「七月十日に雷が南の方に光って民部省の庸を蔵した社屋が炎上した。『忍壁皇子の宮の失火が延焼して、民部

省を焼いた』というものもある」という記事があり、この時焼失した場所が難波宮であるか飛鳥浄御原宮であるかの議論は残りますが、これが、七月二十日の朱鳥改元の決定的な引き金となった可能性もあると考えています。

朱雀改元と朱鳥改元が瑞祥改元であったか災異改元という議論は必要と思われるかもしれませんが、いずれにしても天子の交代を意味したものではないと考えたと、朱雀期、朱鳥期の倭国王（九州王朝の天子）は引き続き倭姫王であった可能性が高いと考えます。

次号では、最大の謎である大化改元、但し日本書紀に記された六四五年の大化ではなく、二中歴に記された六九五年（持統九年）の大化（\*この大化年号は「皇代記」などにも記載されており、この大化を「持統大化」と呼ぶ通説学者もいる）について、考察を深めます。



## 同じ青春を過ごした

### セツラーの想い

かつて全国の大学に学生セツルメントというサークルがありました。そのサークルに入り地域活動に参加した学生たちのことをセツラーといい、互いに「ジャリトラ」とか「ホッペちゃん」とかいったニックネーム（当時はセツラーネームといいました）で呼び合って交流を深め合い元気に活動していました。その活動の具体的な様子は後にある三人の文章に見られるとおりですが、セツラーたちは地域の中に入り地域の子どもたちや地域の課題に取り組む運動に関わる実践の中でさまざまなことを学んでいったはずですが、それから五〇年が過ぎ、そのセツラーたちもすでに七〇歳前後。心に残るさまざまな思い出や今語らねばという思いとから文章を寄せてくれました。すでに歴史的な史料ともいえる内容もあります。不定期な連載になります。が、「かくの如き青春もありき」と思っていただければ幸いです。一度お読みください。

なお、戦後学生セツルメント運動の記録および分析については岡本周佳さん（現在、関西学院大学助教）が日本福祉大学に提出された社会福祉学の博士論文「戦後学生セツルメントの展開に関する研究」（2019年度）があります。この論文の末尾には論文に関わる二三八点の資料目録、年表があり、そして論文の末尾には旧大阪府立大学（現



大阪公立大学)が収蔵している学生セツルメント関係資料目録(二〇〇〇余点もの資料があります)があつて貴重なものとなっています。日本福祉大学のホームページ「博士学位授与実績」から閲覧できます。岡本さんの論文に興味を持たれた方はどうぞご覧になってください。(編集担当)



一九七三年頃に全国学生セツルメント連合から出されたポスター。全国の学生セツルメントのサークルボックスに張られていた。当時のセツラーたちの思いがうかがわれる。

2023・9・18

学生セツル同窓会開かれる！

東京、鎌倉、九州など各地から30人の仲間たちが共に過ごした京都の地に集まった。

70歳を越え、一緒に過ごした20歳前後の青春から50年を超えての何回か

の出会い。

学生時代に、今後の生き方を模索するお互いの想いをぶつけ合い、大学構内を離れて地域の子供会活動や青年たちとの交流、地域のおじさんおばさんとの会話のひと時を過ごしたサークルであるセツルメントの活動に参加した者たちです。

この学生サークルは、全国各地の大学で取り組まれましたが1980年代には、全国での活動はほぼ衰退しました。

そこには「人」がいて、お互いの感情も含めての仲間同士の触れ合いがありました。

子供との触れ合いを通じて、教師への道を選んだ仲間や研究者の道や民間企業や公務員の道を選んだ仲間も、どれだけものを大学の学問で学んだか人によって違いはあるが、ここで学んだものを、そのサークルの中で触れ合った「人」に役立つ生き方を真剣に考えて、社会人として歩いてきた人たちである。そして集まりの中では、青春時代に思い切り「仲間と歌った歌」を歌う楽しい時間を過ごしました。

お互いの今を、元気に語り、相応の体の具合によってこれからの人生をどれだけ過ごすことになるかはわかりませんが、これまでの想いを語り合いながらの一里塚の出会いでした。

何人かのなかまが、この「芥川だより」

の編集に参加しているよしみで、セツルメント活動に参加した仲間たちの今の想いを寄せるコーナーを作っていたいただきました。

どれだけの仲間が、投稿してもらえなかったかわかりませんが、そんな人たちのコーナーができてその時々々の想いを交流できることになったことを喜んでいきます。

その一人であるセツラーネームヒネからのメッセージを投稿します。

私自身は、金融機関に就職をして、セツルメントで学んだ「なかま」を職場でももとめて労働運動に定年まで関与してきました。厳しい成績で追われる職場でしたが、どこの職場に転勤しても人との触れ合いを確かめ合える仲間がいたことは、「人を信じて生きる支え」になっています。いまの「今だけ、金だけ、自分だけ」といわれる生きにくい世の中でも、「人」を大事にしてこれからの人生を生き続けていきたいと思っています。

「派遣村」と「東九条」

伍賀 一道

昨年の大晦日に東京日比谷公園の「年越し派遣村」に出かけた。昨秋以降、不況を理由にトヨタやキャノン、ソニーなど大手企業は一斉に派遣会社との契約打ち切りを強行したため、解雇され派遣会

社の寮を追い出された労働者は行き場を失い、なかには路上生活を余儀なくされた人もいた。「派遣村」はこうした労働者の年越しを支援するため、労働組合やNPOが実施したものである。私はわずか6時間ほどの滞在にすぎず、米や野菜などの支援物資の運搬や、宿泊用のテントの設営、布団敷きの手伝いをした程度である。もう10年若ければ、元派遣社員らと一緒に年越しをしたのだが……。

作業の合間に日雇い派遣をしている40代前半のYさんから話を聞かせてもらった。「取材ですか」と尋ねられたので、「いや取材というわけではないのだけれども、派遣労働について研究している」と説明し、私の名前と職業を明らかにした。

Yさんは派遣の仕事の内容をはじめ実に詳細に語ってくれた。住いがなくいつもは健康ランドやマクドナルドで「宿泊」していること、正月の間お金が入らないため派遣村にきたこと、九州に両親がいるのだが10年以上も連絡をしていないこと、正月には帰りたいといつも思うのだけれど交通費がないためかなわないうことなど……。そして別れ際に私に「よいお正月を」と挨拶してくれた。私は何と返してよいかわからずあいまいな笑みで応じるほかなかった。

この時、セツルメントの一場面が頭をよぎった。当時、「東九条」の若者を集めて漢字や憲法、労働法などの勉強会をし



ていた。さまざまな事情で中学にきちんと通っていない若者にとって仕事に必要な自動車運転免許を取ることも容易でなく、また雇い主から無理難題を押しつけられた時にどう反撃すればよいのかわからなかったからである。

若者たちと同年代の私たちは（私は）得意げになって「教えた」こともある。

勉強会のなかで、あるいは終了後、Mさんをリーダーとする若者たちから、私たち学生セツラーは「どういう姿勢でやっているのか、大学を出たら俺たちを利用する側に回るのはないか」と問いただされたことがある。それも一度や二度ではなかった。そうしたこともあって私たちは「自己変革」という言葉をしきりに使い、どうすればそれが可能か真剣に議論をした。

あれから40年余が経った。「東九条」で見た貧困は経済成長によって解消するどころか、形を変え、その度合いを強めて日本全国に拡散している。日雇い派遣に象徴されるように、明日の仕事の保障がない働き方・働かせ方が増え、しかも若者にまで広がっている。一時期減っていたネットカフェやマクドナルド、あるいは公園で夜を明かす人たちも再び増加しつつある。

あの時のMさんやI君やH君は今どうしているだろうか。彼らからつきつけられた問いに胸をはって答えることができるだろうか。「東九条」で青春を過ごし

た私たちは全国に広がった「東九条」に對してどう向き合えばよいか問われているように思う。

(2009・1・4) 記

学生セツルメント活動の思い出

大前哲彦

最近、識字・日本語学習や成人基礎教育が注目されています。識字学級は福岡で始まったと記録に出てきますが、私たちも同じ頃にセツルメント兄弟会として青春教室をやっていました。この記録を残しておく歴史的使命を感じています。

カトリックのデフリー神父が、アメリカやカナダで寄付を集め、京都市が土地を提供して希望の家が建設されました。デフリー神父は、東九条の子どもたちが差別されるのは、学力が低くて礼儀作法を知らないからと言って無料の学習塾を始め、ビッグシスターとしてノートルダム女子大の学生が手伝いに参加し、手が足りないから他の大学からも応援に参加するようにになったのがセツルメント兄弟会の始まりでした。一九五〇年代の終わり頃のことです。

勉強に打ち込めなくて立ち歩く子どもたちを、やる気のない奴は出ていけ！と

いう対応をしておられた先輩達、東岩本児童公園のトイレに連れ込まれ、「おまえら、学校の先公と同じやないか！」と殴られたこともあったとか？

ボランティアという概念があったら良かったけど、無かったのでキリスト教的な慈善活動に馴染めなかった先輩達は自己規定に悩んでいました。誰もやる人がいないから我々が仲立ちをしている、今教えている子どもたちが高校生や大学生になったら、我々に代わって教えるようになる」と自己規定をしていました。

しかし、期待していた子が高校に入学したので、訪ねて行ったら、スラムを出てしまっていた。一方で、やる気のない奴は出ていけ！と追い出していた若者達は、中学校を卒業しても、希望の家の周囲をうろついている！ことに気がついたさうです。

そこで、スラムを良くするのは彼らだ！と思ひ至り、サークル活動を始めたわけです。卓球部や野球部で仲良くなつて勉強会に呼び込む構想だったが、デフリー神父から学生は不良と付き合っている！希望の家から出て行け！と言われましてしまいました。

やむなく、スラム街の各アパートに出かけて行って、一緒に遊んだり、勉強会をやる活動になったが、スラムの人々から白い目で見られて当惑した話が伝わっ

ていました。そして一九六五年頃に私達は参加しました。

そして、京大の11月祭にユネスコや部落研の子ども会と共催で、子ども祭りを企画し、市電を借り切つて、子どもたちを大学祭に迎え、創作劇を演じるようになりました。

以上が、青春教室の前史、バックグラウンドです。

地域の青年達は、京南チームという野球チームで根性を鍛えて東九条を良くする！と頑張っていました。地域のおばさんに福祉事務所に一緒に行つて頼まれたところ、生活保護の申請書を代わりに書いてくれるように依頼され、漢字の書けない青年は、赤っパチをかく羽目になり、根性だけではダメだと気付いたということでした。

そこで、青年グループが、私を訪ねてきて、漢字を書けるようにしてほしい！自動車の運転免許を取れるようにしてほしい！親方に怒鳴られた時の言い返し方を教えてほしい！と依頼してこられました。

日曜日の午後は京南チームで根性を鍛え、夜7時から9時まで希望の家を借りて青春教室です。一回も休まず、夜10時近くまで勉強会を続けました。

漢字学習は、学生手帳に載っていた当

用漢字をアから順にやるわけですが、「暗」は、暗黒街のボスとしてアル・カポネの話、遅れて移住したイタリヤ系の移民は、下層の生活にならざるを得ず・・・、といった調子でドラマティックに授業を進めて行きました。この漢字学習が一段落した頃に現役の中学生の評判になり、自分たちも参加させてほしいと言ってきた。また、アル・カポネの話からやらなければならぬ、と相談していた時に、7人の青年から、自分たちが順番に先生をやる！大前先生の話は、ノートに取っているし、復習になる！ということになりました。

「親方に怒鳴られた時の言い返し方」の学習法について当惑していたら、立命の法学部4年生の先輩が、労働法をやったら良い！と労働法を鉄筆で書いて印刷してくださり、私の講義を後ろで聞きながら助言してくださいました。

私も何時までもやっておれないと考え、京大の法学部1年生を青春教室の後継者として参加させていましたが、就業において被雇用者が負傷した際、雇用者の責任で・・・という法文を読み上げ、さて、何が書いてあるのか？と問いかけることから始まるわけです。ところが、法学部1年生が手を上げると予想していたが、地域の青年の方が先に手を上げ、この前、たっちゃん、旋盤で指を飛ばした時、親方に怒鳴られていたけど、これは、親

方の責任と書いてあるのと違う？というわけです！

私は、教師をしていた父の書架にあった『山びこ学校』を読んで教育に関心を持って教育学部に入學し、セツルに入部したわけですが、これらの体験を踏まえて成人教育・社会教育を専攻するに至った次第です。

これは、粗筋ですが、具体的な記録を踏まえて実践録として残しておきたい次第です。

(2023・2・24) 記

#### 「道をゆく」四四

成瀬和之

#### 「女芭蕉の心意気

#### 桑原久子の旅日記から」(二)

#### 関所をすり抜け山道を

久子さん達の伊勢参宮以後の行程を考えると、高校山岳部顧問の経験のある私も驚くような山道を通っています。これは巧妙に関所を敬遠しているコースなのです。往路の中山道には福島の関や碓井の関、復路の東海道には箱根の関、新居

の関があります。いずれも現代に復元されており、いかめしいたずまいを彷彿とさせます。

しかしそこを回避するコースも旅人には知れ渡っていました。江戸社会の末期近くになると、公式には「天下の大法を犯す」ということになりましたが、一般庶民のうちに、サムライがつくった文化なるものに対して、サムライの顔を立てながら、「それはそれとして」自分たちの方法(やりかた)も持っているという気分が、蠢動(ゆんどう)し始めていたのでしょうか。

「明治維新」はサムライだけでやれるものではなく、そうした庶民のエネルギーの後押しがからできたのでしょうか。それは「おかげ参り」や「ええじゃないか」などにも通じる「世直し」を求める気持ちでしょう。

久子さん達の直面した難関を順次、挙げてみます。

#### ①福島の関を回避して大平街道へ

久子さん達は、福島の関を回避するために、大平(おおたいら)街道を通ります。

大平街道とは旧中山道妻籠宿から大平峠(標高一三三六メートル)を超えて大平宿に至り、伊那谷の飯田市に出る道です。

これは木曾山脈を横断するもので、日本の背骨である日本アルプスの一つに踏み込むことを意味します。久子さんは詠みます。

「ふみならしひとつこゆればまたひとつ つきぬは木曾のみさかなりけり」 久子

日本で二番目に高い南アルプスの北岳(三一九二メートル)に私が登った時、「あそこがピークだ」と思って登ったら、また次のピークが現れる、また登ると、また次のピークが現れるという経験をしたのでしよう。北岳は飯田市のすぐ北東に聳える山です。

久子さんは大平宿の茶屋のあるじの話聞き、次のように書いています。

「この茶屋のあるじひけるは、この辺の山に、過し申ノ年に竹みのりて、是をねぢこ、また野麦ともいふ。ある人の此度は一〇三年にみのれりとかたれり。大平にていささか此実をえりて帰る。」

久子さんたち四人は皆五〇歳代ですが、その長い人生でも未知の話でした。天保の頃飢饉があり、「此の笹麦の実のおかげで先年の飢饉も二、三年はしのげました」とあるじは言うのでした。

#### ②碓井の関を回避して下仁田街道へ

四月一日、久子さん達は、軽井沢の追分から碓井の関を回避しようと南東をめざします。碓井の関は横川の関ともいい、上り下りの「女改め」がうるさいのです。

中山道を行く旅人は、軽井沢から松井田、安中と辿りますが、その間の碓氷峠にある関所を敬遠して南東へカーブし、群馬県の高崎へ出て、日光街道をめざします。これは下仁田（しもにた）街道の一部です。小田宅子さんは『東路日記』に書いています。

「是よりしげ山をかなたこなたにつたひて、岩が根、葛かつらなどをよちつつ、からき目を見てやうやう峠につく」

宅子さんはこの茶屋で「近くに聳える峰を中尾岳と教えられる」と書いています。『姥さかり花の旅笠』でも田辺聖子さんも「中尾岳」と書いていますが、これは聞き間違いでしょう。

桑原久子さんは『二荒詣日記』に次のように書いています。

「中ノ嶽の大黒天に詣づ。此所岩山にて、石ノ門五ツあり。夫より一里半くだりて妙義山にまうづ。これもうるはしき宮立なり。」

妙義山の東側にある妙義神社の西約六キロメートルに「日本一のだいきく様」を唱える中ノ嶽神社がありますので久子さんの記述の方が正確だと思われまふ。しかし、宅子さんは久子さんよりも詳しく書いています。

「岩むら多く、大きい岩は畳八枚ほど敷けそうだった。頂きに石の宝殿があるというが

女人は参詣禁止である。石の門が五つあったが、みな岩を刳（く）り貫いたものだった」

久子さんは続けます。

「こより群馬ノ群榛名山に登る。七里あり。この入ノ坊へ宿る。榛名ノ借行宮大権現ませり。（中略）此宮は岩山にて誠に日本無双の風景なり。

たぐひなきみねぞと人も岩むらのかさなる山にけふはのぼりて」

③箱根・新居の関を回避して甲州街道。・秋葉街道へ

久子さん達は、箱根・新居の関を回避するために甲州街道に向かいます。

久子さん達は藤沢の遊行寺に詣でました。この藤沢に実は重大な用があつたと書きました。このまま東海道を進めば、箱根や新居の関があり、防衛上橋のかかっている大井川などもあります。「入鉄出女」を取り締まる関所に引掛かります。それを避けようとするれば、藤沢から甲州街道に向かい、日本列島の真ん中を大迂回しなければならぬのです。

前田倅先生の「近世における筑前から日光への女旅」という論文によれば、小田宅子の『東路日記』福岡女子大本には、前文に引き続き、次のようになっていきます。

「三八里の間にうら番所と云物三所あり。教えにまかせて其人をたのみてゆくに、先藤沢より西北をさして、細道をたどりて石川村といふにつく。此間巷里」

ところが、『東路日記』福岡県立図書館本では、傍線部分が削除されているのです。その他にも、関所を抜けようとするきわどい描写の部分が削除されています。前田倅先生は「これが削除されているのは、後にそのような記録が残ることへの配慮であろう」と言われています。

久子さんの『二荒詣日記』には「こまの灰とかいへらむようなものにつけられて、心をなやますことかぎりなし」と書かれています。「胡麻の灰につきままとわれる」というのは、関所を回避しようとする「不法行為者」の弱みに付け込んで絡んでくる荒くれ男たちのことです。関所を回避する女旅にはこのような心労もあつたのです。

久子さんらの計画によれば、藤沢から西北をめざし、甲州街道へ出、再び信州（長野県）に入つて上諏訪まで北上し、そこから南下して遠江（静岡県）の秋葉神社に至る秋葉道を通り、御油宿で東海道に再び合流しようとする壮大なルートを進みます。これは女旅を支援する「旅のプロ」のネットワークの存在なしには実現しえないでしょう。長野県から実際に秋葉街道を進んでみると実感できます。

秋葉街道の難所、小川峠（現代では小川路峠）を超える時のことを宅子さんは『東路日記』に次のように書いています。

「巳午（みうま）南南東のこと」のかたをさしてひたのぼりにのぼるに道あしく苦しさ、いはんかたなし。みな人、足もつかれにたれば、

いぞぐとも手に手をとってふみさぐみ、足つまづくな岩みらの道 宅子

久子さんが返します。

「岩むらのあやふき道もつまづかず、しりなる人に腰押さされて 久子」

互いに助け合つて、険路を進む様子が歌われています。

小川路峠は、飯田市と下伊那郡上村との間にある峠で、標高一四九四メートルです。車は通行止めになっていて、柵を超えて少し歩きましたが、誰一人として出会う人はいませんでした。飯田の町と静岡県の秋葉神社を結ぶのが秋葉街道ですが、小川路峠から上村へ出た後は、さらに南下して和田宿を経て青崩峠を越え、秋葉神社に通じています。江戸時代は秋葉詣りや善光寺詣りでにぎわいました。宅子さんが「いとさかしき山路にて五里ありといふ」と書いています。約二〇キロメートルです。伊那谷から遠山郷への最短ルートなのですが、「遠山郷へ赴任する教員や警察官が職を辞めなくなるこ

から辞職峠の異名をとるほどであった」

と言います。青崩峠は、あまりの崩落の激しさに日本の鉄道技術が敗退し、秋葉街道は現在も車は通行止めです。車を止めて少し歩きましたが、草に覆われてルート探索が難しいところもあります。

久子さん達は、小川路峠から青崩峠へ向かう途中、雨さへふつてきます。馬を借りようとはしますが、折も折、時期が悪いと貸してもらえません。宅子さんも「かかる事も旅のならひととおもへば哀れにならん」と本音が出て寡黙になります。

いよいよ難所として有名な青崩峠にさしかかります。宅子さんは書きます

「いとさかしき坂路にて、崩れたるみねの傍らを行間(ゆくあいだ)、いとあやふし。

山風もあらくな吹きそ青くずれ 崩れ氏しみねを打ちこゆる日は 宅子」

青崩峠は信濃の国(長野県)と遠江の国(静岡県)の境界です。ついに信濃を脱したかと思えば、天竜川の源の川です。日も暮れますが宿るべき家ありません。宅子さんの『東路日記』の文章の中でも最も意気消沈した文章となります。

「是より三里ばかり行かざれば宿るべき家なきよしなり。みな人、いたうつかれにたればものもいはずなりぬ。なほ河を超え山路をたどりゆくに、こしかた行末、人も見えず、

日は暮れはててものがなしさ類なし。道さへおぼつかなき闇の夜なれば、

いかにせむ知らぬ山路に行き暮れて あはれやどらん家もなければ 宅子」

五月三日、このような思いをして、久子さん達はようやく秋葉神社に到着します。祭神は火之迦具土神、火伏せの神さまとして篤い信仰を寄せられています。関西では京都の「愛宕さん」が火伏の神として有名で、秋葉神社まで来る人は少ないでしょう。

久さんは『二荒詣日記』に次のような歌を詠み、書いています。

「見るうちにときほうつれどころには あかぬ秋はのかみのみやだち

此宮の社領五〇石となん。祭は毎月二四日にして、大祭は霜月一〇日より一六日までなりといふ。またこの社の内に、長サ三間ばかり、めぐりは屋ノ柱のごとくにして、珍しき火箸あり。この火箸を御祭の時、宮人、神楽のとり物に用ふるよしなり。」

台所の一間には大きな釜をあまた据え、からわらに火箸という柱のように大きなものがあり、この社の祭の時に用いるというのです。現在の秋葉の火祭りは一二月一五、一六日になっています。

久さんらは、青山峠を越えて遠江の国から三河の国(愛知県)へ入ります。

五月四日 久さんは鳳来寺へお参りしたい宅子さんらと別行動をとりまします。そして豊川稲荷へ詣でて、御油へ向かてきた「姫街道」と別れて、この御油からようやく東海道に入ります。東海道へ入れば宿場の数は知れたこと、別行動を取っても連絡はすぐ取れるという算段です。

## 俳句

影山 武司

アトリエの玻璃の磨かれ秋澄めり  
築地塀の路地に迷ひて秋の蝶  
秋霖や足音響く円天井  
翼めく駅の大屋根野分晴  
子を叱る声の洩れくる青瓢  
西方に浄土の風や曼殊沙華  
一行の墓誌の余白や曼殊沙華  
秋の薔薇風にほのかな色を乗せ  
初恋は遠くなりけりマスカット  
佳き人と肩の触れ合ひ秋桜

## 編集後記

SK生

▼今回、学生セツルメントのOBの皆さんから原稿をいただき本号の紙面に載せることになった。本誌の中で少しく説明したとおり、かつて多くのセツラーたちがそれぞれ地域で実践活動を熱心に行っていた。それから約五〇年が経ち学生セツルメントのOBの皆さんの証言はもはや戦後史を語る上での一つの史料ともなっている。▼大学を卒業して理想を胸に抱きつつ、五〇年を生きてきたことということ。それはそれぞれにとって忘れ得ぬ記憶となっているに違いない。もちろん、現代の社会システムは猛烈な勢いで甘い理想をすりつぶしていく。いやおうなく面従腹背の生き方を強いられることも多かったのではあるまいか。多くの人が学校で学習した森鷗外の小説「舞姫」の主人公太田豊太郎と同じ苦渋を程度の差はあれ味わったことであろう。▼元文部科学省の官僚であった寺脇妍は「私は国旗、国歌に対し保守派のよきな無条件の敬意は持ち合わせません。でも31年余りの公務員だった時期は、内心を明かさずふるまってきたのです」(朝日新聞 2010.11.12の記事)といっている。31年間、内心を隠し続けて官僚を務めあげた彼をどう評価するのか。「秋風やここにも一人豊太郎」などと駄句を吐いて苦笑いするほかないのか。人の生き方をあれこれと論評することはことほどさように難しい。

よく読んでよく詠めないというギャップ

しかし本当だろうかと思わないでもない。よく詠めないことは確かだが、よく読んでいるだろうか。実際のところは、読むのも詠むのも難しいのだ。何事であれ、

満点と想う心にあるおごりそんな落とし穴にはまっていないかと思うのだが、つい深読みをしてしまう。

捨てきれぬ言葉こころの壁の中 羊子

殊更にも言わずとも人はみな心の壁に歌秘めてあり。「捨てきれぬ」思いを言葉にするかどうかは人それぞれですが、つぶやかずにおれないのが川柳人評論家・加藤周一の言うとおり、「魂は表現されなければ、それが存在するのかどうか当人にさえはつきりしない」のです。詠むとは、「こころの壁」にある私の思い、魂を言葉にする作業。

不意に来て大水害の置きみやげ 浜子

夏の大水害や冬のどか雪、大規模な山火事の発生など、自然の災害が後を絶ちません。災害はある日突然やって来ます

が、結果としては日常茶飯事。背景に地球温暖化による異常気象があります。

平均気温で一度か一・五度の上昇が何をもたらすか。たとえば、気温が一度上昇すると大気中の飽和水蒸気圧は数%高くなり、雨となる大気中の飽和水分量が増加します。自然界では数%の変化は劇的な変動をもたらします。天気なら、1%の気圧変化でも晴れか雨かの分かれ目。気圧が数%も下がれば大型台風です。今夏は、国連事務総長の言うとおり「地球沸騰化」の夏でした。

今はまだ思うだけです恩返し 正彦

人生百年時代と言われます。世の情け人の情け、受けた恩が返せなくなるほどますます大きくなり、「今はまだ思うだけです」ともなる。しかしそんなことはない。この句を読んで、認知症になりながら長生きをした義母の姿に、生きていくことが恩返しなのだと思つた記憶が蘇ってきました。

噛みしめて今朝もしつかり食べている百寿の母は俺より偉い

夏来たる祭り囃しの太鼓の音 鈴子

血が騒ぐ祭りの季節夏来たる

手作りの衣装で踊る夏祭り 和俊

ワッショイ三年振りの夏祭り ひろむ

三年のコロナ禍を越えて夏祭りの句が揃いました。祭りを支えた人たちが、参加した人たちの喜びもひとしおだったでしょう。屋台の賑わい、浴衣を着た子どもたちの弾んだ声が聞こえて来ました。

没句から命を貰う入選句 幹夫

「没句から命を貰う」という発想にハッとなりました。いつだって、練り上げた心のかたち五七五、句は私の叫びだと思込んで没句しますが入選ゼロか、せいぜい一句。それでも私は大会が面白い。なぜか。入選句を見て、句に対する作者の視点(ものの見方、考え方、感じ方)とそれを表現する方法(言葉の選び方、並べ方)の広がりや深さに圧倒されるからです。負けたーと思ひ、かと言ってぐ身に付く訳でもありませんが、いい勉強になります。入選句の豊かな表現に触れて、川柳は人生の学校だ、と思つたりします。

その上で、もう一度、この句を読んでもみました。没句は公表されず、選者の記憶にも残りません。没句を知っているのは作者だけ。しかし、作者の私にも、没になった自分の句に「命」があることなど思いもよらなかったことでした。私

には、没句の命をもう一度新しいかたちに練り上げる仕事が残っていたのです。

贅沢は自採りトマトのソースです 春子

山緑田んぼも縁元気出る 久仁夫

本は胸抱いて居眠る夏の午后 ふみお

一句目と二句目。食の自給自足は、その風景までもが最高の贅沢だと思う夏です。三句目、その夏の午後、本を胸に抱いて昼寝する。元気の証、どんな夢を見たでしょうか。

語つた夢夢置き去りに友は風 ミヤ子

淋しいよことわりなしに友が逝き 澄子

大切な人を亡くす。それは、さびしいかぎりです。しかし、

花を持ち会いに行きたい人がいる

そう思えるのは、

人は逝き遠くて近い人になる

からです。私の心の中にいる、遠くて近い人です。